



Title	音象徴を教える？
Author(s)	岩井, 康雄
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2025, 23, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

音象徴を教える？

How should Sound-Symbolism be Taught?

岩井 康雄

【要旨】

研究科目として行った言語学、音声学に関する授業の中で、音象徴について取り上げた。音象徴は、数年前から「はやり」のテーマではあるが、それを授業の中で取り上げる際には、様々な難しさが存在する。授業の中で「音象徴」を取り上げ、ある程度の時間をかけて、その基本的な考え方、研究史、現在の研究とその問題点について、題材として取り上げた。

取り上げてみて、この題材に対する学生の反応、話題の広がり、そして危うい点など多くのことに気づいた。本稿では、それらについて報告する。

1. はじめに

数年前に、言語学のブームといえるようだと思ったのは、よく行く書店でトマセロの著書が認知科学コーナーから言語学コーナーに移されていることを、なじみの書店員から聞いたときだった。移されたこともだが、書店員がそれを覚えていた（言語学コーナーを意識していた）ことが、コーナーの「重み」に関係していると勝手に思った。その後、ブームは大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、CJLC）の学生にも影響を及ぼしているのかもしれないと思えることが現れた。

担当する言語学関係の授業の受講者は、年によって数の増減はあったが、その意識は、このところ変わってきたように思える。音声に興味があるのである。音声学があるからCJLCを選んだという学生がいた。オノマトペについて、友達が研究しているので、自分も深く知りたいという学生もいた。そういった彼らは、音象徴について積極的に学びたいと希望した。また、音声学に特に興味があるわけではない学生も、イントロダクションとして音象徴について簡単な説明をすると、強い関心を示した。

授業で音象徴を取り扱うのは、何とはなしに気乗りがしなかった。ブームの中心のようなテーマだからという反発もあったが、「胡散臭さ」を感じているということも大きな要因だった¹⁾。しかし、上記のような学生の要望もあり、「胡散臭さ」も含めて、授業で取り上げることにした。以下は、その授業についての報告と分析である。

授業では2023年度および2024年度の秋～冬学期と2024年度の春～夏学期に、ある程度まとまった話として、音象徴を取り上げる授業を行った。授業タイトルは前者は「日本語の音声・音韻」、後者は「言語学概論」と異なっており、音象徴に関する話の広がりについては、前者では音象徴の要因と考えられる、調音的・音響的特徴についてまで話し、後者では恣意性とオノマトペの有契性について、やや詳しく触れるといった調整をしたが、基本的な内容に変わりはなく、本稿では両者をまとめて報告する。

2. 授業の概要

対象となる授業は、CJLCの研究科目として提供されている授業で、受講対象者は、主に日本

語・日本文化研修留学生とメイプル・プログラム留学生（短期留学生）である。日本語レベルはCJLC評価のC1あるいはB2であったが、そのときどきでレベルに幅があったため、配付資料にルビを振る、一般的な語彙でも授業中に簡単な説明を加えるなど、受講生のレベルに合わせて、授業実施上の対応を行った。受講人数は平均10名という規模であった。

以下は、授業時に配布したプリントから、音象徴の部分の章立てを抜粋したものである²⁾。

0. 音象徴と言語

0.1. 言語の恣意性と対立（価値）

0.2. 有契性・アイコン性（類像性）と恣意性

1. 音象徴

1.1. 言語普遍性

2. 音象徴とオノマトペ

2.1. 言語固有性

1) 世界の言語のオノマトペ

2) 清音／濁音

3) 日本語オノマトペの歴史的变化・地理的变化

2.2. 音象徴的要素

3. 音象徴の音声学的説明（アイコン性）

3.1. 調音音声学的説明

3.2. 音響音声学的説明

3.3. 多感覚統合・共感覚

（補）言語はいつ「詩」になるか

全体の流れとしては、まず、イントロダクションとして「言語の恣意性」とオノマトペ語彙の有契性、その背後にある言語普遍的な音象徴のあり方と言語音の言語固有性、そして音象徴の普遍性を支える音声学的背景と進めた。最後に音の響きを持つ特別な機能について、押韻の問題から説明するために「補」を設けた。

3. 授業内容

3.1. 言語の恣意性と有契性

まず、音象徴がなぜ問題になるかを、ソシュールの「恣意性」の概念を用いて、説明した。次にオノマトペ語彙や音の伸張（非常に広いことを表すときの「ヒーロー（広い）」といった発話に見られる、実際の広さと表現との関係）などを用いて、言語に見られる有契的な側面を取り上げた（オノマトペ語彙では、動物の鳴き声のような、どの言語にも見られるであろう擬音語³⁾を中心に類似性を指摘した）。

3.2. 音象徴の言語普遍性

まず図1を示して、Sapir（1929）で示された実験を再現してみる。二つのテーブル（筆者作

図)の内、どちらが“mil”で、どちらが“mal”であるかを問うものである。ほとんどの学生が大きいテーブルに“mal”を、小さいテーブルに“mil”を当ててるのを確認した後、それが日本語を知らない被験者に「ネコ」「イヌ」という言葉と図を用いて同じ実験を行った場合、どのようになるかを想像させ、その意味について考えさせた⁴⁾。

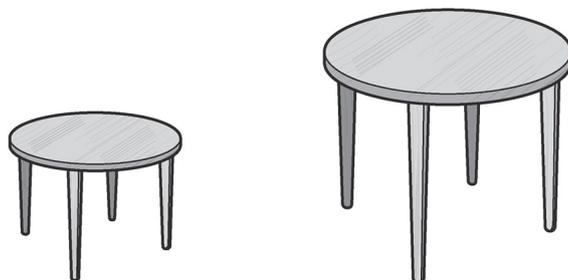


図1 Sapir (1929) の“mil”、“mal”

次に同様のことが、母音の違いだけでなく子音類の違いでも起こることを、図2, 3を用いて確認させた。どちらの場合も、“takete”、“kiki”のように無声阻害音を中心とした音列ととがった図形、“maluma”、“bouba (ブーバ)”と丸みを帯びた図形を結びつける回答が多いこと⁵⁾を確認させ、“mil”、“mal”の場合と同様、そのような偏りと一致が起こることの意味を考えさせた。



図2 Köler (1929) “takete” “maluma” 図3 Ramachandran and Hubbard (2001) “kiki” “bouba”

図はいずれも坂本 (2019) より

テーブルの実験、図形の実験共にある種の音(音列)と概念(「大きい」「小さい」、「尖った」「丸い」)とが結びついている(偶然以上の確率で一致が起こる)ことを示す実験として理解を促し、本来恣意的であるはずの音と概念の結びつきが、このような例では恣意的ではないこと、即ち、音象徴的な関係があることを示した。

この後、音象徴が世間的に話題になった要因ともいえる「ポケモンの進化」(進化後のポケモンの名前に濁音が多い)や「メイドの名前」などについても取り上げてみたが、音象徴の普遍性を示す素材としては、あまりうまく使えなかった。いずれも概念の複雑さが影響しているものと思われる。ここでは、概念の複雑さに関わる例として「メイドの名前」についての実験とその際に見られた回答を紹介する。

川原(2017)に秋葉原のメイドの名前に関する考察がある。メイドには「萌えタイプ」(「かわいさを追求する」p.40)と「ツンタイプ」(「ちょっとお姉さんの的な、クールでツンとした雰

囲気を追求する」p.40) があり、前者と共鳴音の名前(「ワマナ」「レヨナ」など)、後者と阻害音の名前(「サタカ」「セトカ」など)との結びつきが強いとのことである。実際の実験の詳細は記されていないが、授業では上記の両タイプの説明を行った後、書籍の帯に使われている絵を示して、「ワマナ」と「サタカ」のどちらの名前がどちらのメイドにふさわしいと思うかを問うた。図4では印刷の関係で白黒印刷となっているが⁶⁾、書籍の帯では、上の萌えタイプと思われるメイドの髪は緑、下のツンタイプの髪は赤茶色であった。

どっちがワマナで
どっちがサタカ？

音にはイメージがある。
単語の音と意味には関係がある。
これまでにない、楽しい音声学入門。



図4 どっちがワマナでどっちがサタカ？(川原(2017)帯より)

受講生の反応は、必ずしも強い傾向は示さなかった。少数の受講生での実験であるので、統計的有意差というものは考えることはできないが、上記のような結びつき(「萌えメイド」と共鳴音、「ツンメイド」と阻害音)は、ややそのように見えるといった程度の傾向であった。そこで、こちらの期待と異なる選択をした受講生に、どうしてそちらを選んだかを問うと、表情の読み取りなどの相違もあったが、一致する回答としては、髪の色が「萌え」「ツン」のイメージと逆だという意見があった。寒色系の色(緑)は「ツンタイプ」、暖色系の色(赤茶)は「萌えタイプ」と結びつきやすく、そのことが回答に影響しているようだった。

「ポケモンの進化」⁷⁾「メイドの名前」とも、受講生の興味をひくという意味では、有効な対象だが、授業の中で用いるには、それぞれが持つ概念をコントロールする難しさ(何が影響するかをコントロールし、対象となる概念だけを取り出す難しさ)も存在する。

3.3. 言語固有の特徴

音象徴の普遍性について考察した後、音象徴と最も関係が深いと思われるオノマトペについて、世界の言語のオノマトペの多様性について、授業を進めた。秋田(2017)で示されている世界の言語のオノマトペについて紹介し、また、その「意味階層」や類型論的特徴についても紹介した。日本語と同じく、オノマトペが豊富だとされる朝鮮語については、やや詳しく扱ったこともあったが、全体としては「多様性」を示す例を紹介するにとどめた。

その後、なぜ、このような言語間の相違が生まれるのかについて、言語固有の特徴(制約)として、日本語における、音素配列的特徴、歴史的変化、方言差について紹介した。

音素配列的特徴としては、鈴木(1962)による下記の例を挙げて、日本語(和語)の語頭濁

音（有声阻害音）の価値について説明した。

(1) 清音／濁音

- a) /tama/ (玉) → /dama/ (天ぶらのころもの「ダマ」)
- b) /hure/ (振れ) → /bure/ (手ブレ)
- c) /kara/ (殻、空) → /gara/ (鳥のガラ)
- d) /sama/ (様) → /zama/ (ザマを見ろ)
- e) /hareru/ (「疑いが」晴れる) → /bareru/ (「悪事が」バレる)
- f) /suru/ (擦る) → /zuru/ (ズル)
- g) /hateru/ (「疲れ」果てる) → /bateru/ (バテる)
- h) /koneru/ (こねる) → /goneru/ (ゴネる)
- i) /sureru/ (擦れる) → /zureru/ (ズれる)

cf. /ahureru/ (溢れる) → /abureru/ (アブれる)

鈴木 (1962) では、これらを示し、右項には「情緒的態度 (emotive attitude) 或いは評価 (emotive evaluation) が含蓄的意味 (connotative meaning) として附加されているものと見做すことが出来」とされている。授業では、語頭の濁音に「悪い」イメージが結びついてるといった説明もしたが、付加されるイメージは、「悪い」というイメージだけではないかもしれないことについても付け加えた。女性の名前に語頭濁音が非常に少ないこと⁸⁾を、その年度の子供の名前ランキングなどを示して確認させ、語頭濁音が何か女性の名前に相応しくないとされている (であろう) 印象を持たせるのではないかとすることを説明した。

筆者は、先に (注5) で記した「“bouba” は丸い凶形っぽくない」という感じ方のベースに、このような濁音の分布の影響があるのではないかと考えているが、鈴木の言う「含蓄的意味」が、漢語や外来語では、必ずしも観察されないことと併せて、さらに考えていきたい。

歴史的変化としては、橋本進吉『駒のいななき』に見られる下記の記述や、歴史的なオノマトペの例を挙げて、現在との相違を示した⁹⁾。

(2) 「国語の音としてhiのような音がなかった時代においては、馬の鳴声に最も近い音としてはイ以外にないのであるから、これをイの音で摸したのは当然といわなければならない。なおまた後世には「ヒン」というが、ンの音も、古くは外国語、すなわち漢語 (または梵語) にはあったけれども、普通の国語の音としてはなかったので、インとはいわず、ただイといったのであろう」

方言差については、竹田 (2017) から方言の違いによるオノマトペの相違の実例を示し、小林 (2018) の研究などを紹介した。

どの言語話者にも、ある程度共通と見られる音象徴現象と、個別言語の特徴を反映した、言語としてのオノマトペの間にある相違を理解させることは重要であると考えている (非日本語母語話者にとってオノマトペの理解が困難であることは学習過程を通じて既知のことであり、

潜在的には理解していると言えることではあるが)。

3.4. 音象徴の音声学的背景

音象徴の音声学的背景について、篠原・川原(2013)で示されている調音音声学的説明と音響音声学的説明を中心に、母音の固有ピッチ([i]は高く、[a]は低い)のことなども加えて説明した。

調音音声学的説明は、母音に関しては、概略、口腔の広さ(容積の大きさ)と母音の表す大きさが対応するというもので、「イ」と「ア」のような違いは、容易に理解できる¹⁰⁾。「イ」と「ウ」の違いについては、音声の授業の最初に説明した母音の口腔図を再度示して説明したが、復習材料としてはよかったと思われる。障害音と共鳴音に関しては、調音動作中の「妨害」の強さ(調音努力の大きさ)と対象の「強さ」や大きさが対応するとする説明を行った。

音響音声学的説明では、母音に関しては、フォルマントの説明が必要であり、音声を中心とした授業では行ったが、「言語学概論」の授業内では、十分な説明は出来なかった。障害音と共鳴音に関しては、後続母音の音高に対する影響などを示したが、「音声・音韻」の授業でも十分には触れられなかった。

3.5. その他の関連する項目

授業計画当初は、「多感覚統合・共感覚」や「詩的言語」についても触れたいと思い準備をするのだが、これまで音象徴の授業の中で、そこまで触れられたことはない。視角と聴覚との相互作用に関して、マガーク効果については、授業の他のところで触れることもあったが、音象徴との関連で話すことは出来ていない。筆者としては興味深い対象と思うが、言語の授業を逸脱するものとなりそうである。

「詩的言語」については、音と言語の関係を改めて捉え直す視点として、やはり重要なものと考えている。ヤーコブソンの6つの言語機能について説明し、メッセージそのものへ向かう指向について考察することで、音象徴の持つ可能性について考えることもできるであろう。具体例として、言語のリズムについて、七五定型のリズムについての考察(岩井(1996))を取り上げたり、押韻について、ラップの押韻に関する最近の研究(川原(2023))を取り上げるだけでなく、九鬼周造の押韻論やマチネ・ポエティックの運動などにも話を広げることが出来るものと考えているが、やはり言語の授業を逸脱してしまうものとなる。

4. 音象徴を教える意義

音象徴を教育する意味について考えてみると、言語学の初学者が言語学や音声学に興味を持つ「入り口」としての有効性は高く、注意深く活用すれば、言語について考える好材料と思われる。しかしながら、授業テーマとして取り上げる場合、やや批判的に述べてきたように、疑問(胡散臭さ)も残り、その点については注意を要する。筆者の経験上、注意すべき点をいくら強調しても、キャッチーなところだけを記憶してしまう学生が多く、取り扱う上では難しい点の方が多いという見方も出来るかもしれない。

ブームはいずれ下火になり(既になっている?)、言語学への一般的な興味も薄れていくかも

しれないが、その中でも、「入り口」があることは意味のあることである。今後もスタンスは変えずに、音象徴を授業のテーマとしても取り上げていきたい。

注

- 1) 熊谷・川原 (2017) における質疑応答の際、「何が明らかになったのか」(何も明らかにされていない) という意見があり、その場にいた筆者には、多くの聴衆がそれに同意しているように感じられた。また、最近では山東 (2024) に「音義言霊論かと思ふばかりの音象徴研究が跋扈する」という批判も見られる。
- 2) 本文中でのプリントからの引用は、配布時にあった振り仮名や専門用語の英訳などを除いた形で示している。
- 3) 授業では、受講生の言語でいろいろな動物がどのように鳴くかを尋ねることにしているが、犬、猫、鶏、豚のような日本語では安定していると思われる動物の鳴き声であっても、同言語話者の中で意見の異なることがあった。それぞれの動物に対する「馴染み」度の違いである可能性もあるが、言語ごとにオノマトペの語彙としての安定性に違いがある可能性も考えられる。
- 4) 実際に一人の受講生に、その母語で「イヌ」「ネコ」を発音させ、(その言語を知らない他の受講生に) どちらが犬でどちらが猫かを当てさせる実験を行ったこともあったが、10名前後の学生では、何かの要因で回答が偏ることがあり(偶然多くの「当たり」がでることがあり)、“mil”、“mal”の不思議から話がそれてしまうことがあった。
- 5) 本稿の対象からは外れるが、同じ実験を日本語母語話者に対して行う場合、あまりうまくいかないことがある。“maluma”については、「丸」という言葉が入っているから丸い図と結びつけるのは当然だ、“bouba”は丸い図形っぽくない、という意見が出るのである。前者は無意味語として作られた音列が、既存の語彙と偶然重なってしまったため、日本語話者に対しては別の音列(例えば“malama”のような)を用いる必要があるだろう。後者については、日本語の「濁音」の価値の問題として後述する。
- 6) 川原 (2017) でも本文中 (p.41) の絵は白黒で印刷されている。
- 7) 熊谷・川原 (2017) の発表の際に見せられた絵の中でも、筆者には「大きさ」や「強さ」の変化より、「スマートさ」や「大人びた」といった要素の変化が強く感じられるものがあり、期待される回答とは逆のものを選びたくなるような場合があった。これも視覚的な情報からどのような概念を受け取るかといった問題の一つであると思われる。
- 8) 実際には、一般的な名前としては「ジュン (コ)」くらいしか見つけられていない。
- 9) 「ハ行音」の変遷については、音象徴の授業以前に触れており、その点については「確認」といった程度でよかったが、そもそも馬の鳴き声を「ヒン」と言おうが、「イ (ン)」と言おうが、全くイメージがわからないらしい受講生もいた。
- 10) 受講生に対し、テーブルの実験 (“mil”、“mal”の実験) を行ったとき、どうして小さいものに [i] を大きいものに [a] を当てはめたのか理由を求めたとき、開口度を理由とする回答をする受講生がいた。(この受講生に対し、さらにどうして大きいことと大きい開口度が対応すると思うのかと問うと、大きいものを食べる時は大きく口を開く必要があるからと真面目に答えた。思わず笑ってしまったが、筆者が学生の時に後舌母音は円唇であることが無標である理由として、乳児が母乳を飲む(吸う)ときには、舌を後ろに引く動作と唇を丸める動作が連動する必要があるからという説明を受けたことがあり、そのことを思い出した。)

参考文献

- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトペはあるの？」 窪藪 (2017) 所収 pp.65-84
- 今井むつみ・秋田喜美 (2023) 『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』 中央公論新社
- 岩井康雄 (1996) 「音節構造と七五定型のリズム」『音韻研究—理論と実践』(音韻論研究編) 開拓社 pp.79-82
- 川原繁人 (2017) 『「あ」は「い」より大きい—音象徴で学ぶ音声学入門』 ひつじ書房
- (2023a) 『なぜ、おかしな名前はパピプペポが多いのか?』 ディスカヴァー・トゥエンティワン
- (2023b) 『言語学的ラップの世界』 東京書籍
- 窪藪晴夫 (編) (2017) 『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』 岩波書店
- 熊谷学而・川原繁人 (2017) 「ポケモンのネーミングにおける母音と有声阻害音の効果」第155回日本語学会全国大会
- 熊谷学而・川原繁人 (2019) 「ポケモンの名付けにおける母音と有声阻害音の効果」『言語研究』155 pp.65-99
- 小林隆 編 (2018) 『感性の方言学』 ひつじ書房
- 坂本真樹 (2019) 『五感を探るオノマトペ 「ふわふわ」と「もふもふ」は数値化できる』 共立出版
- 山東功 (2024) 「書評 長田俊樹著『上田万年再考：日本語学史の黎明』」『日本語の研究』20 (2) pp.166-173
- 篠原和子・宇野良子 (編) (2013) 『オノマトペ研究の射程 近づく音と意味』 ひつじ書房
- 篠原和子・川原繁人 (2013) 「音象徴の言語普遍性 「大きさ」のイメージをもとに」篠原・宇野 (2013) 所収 pp.43-57
- 鈴木孝夫 (1962) 「音韻交替と意義分化の関係について」『言語研究』42 pp.23-30
(『鈴木孝夫 言語文化学ノート』大修館書店 1998年 所収 pp.81-94)
- 竹田晃子 (2017) 「オノマトペにも方言があるの？」 窪藪 (2017) 所収 pp.47-63

※本研究は、大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費Ⅱ（競争配分研究補助費）の援助を受けて行ったものです。記して感謝いたします。

(いわい やすお 本センター教授)